

## 地蔵説話の継承と変遷 : 中世から近世へ

著者	清水 邦彦
著者別名	Shimizu Kunihiro
雑誌名	倫理学
号	30
ページ	29-43
発行年	2014-03-20
その他のタイトル	Succession and Change of Jizo Tale
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00124498">http://hdl.handle.net/2241/00124498</a>

# 地蔵説話の継承と変遷

— 中世から近世へ —

清水邦彦

## 問題提起

地蔵説話研究では、渡浩一が第一人者である。渡の研究成果を大まかにまとめると、①中世説話に於いて、地蔵は生身で現れることが、他の仏・菩薩と比較しても、特徴的である<sup>(1)</sup>、②中世説話では、地蔵は後生善処・現世利益の二世に渡る職能を有していた<sup>(2)</sup>が、近世になると、後生善処説話の数が減っているが全く無くなった訳ではない<sup>(3)</sup>、の2点が重要である。

渡の研究成果を踏まえ、本稿は、中世地蔵説話と近世地蔵説話とを比較し、共通点・相違点の整理を試みることで、近世地蔵信仰の特徴を少しでも明らかにすることを目的とする。

## 一 生身の継承

渡が指摘したように、中世説話に於いて、地蔵は生身で登場す

ることが多い。論の整理のため、生身の意味を確認する。稲垣泰一は以下のようにまとめている。

(A) 人間としての釈迦の身体。三十二相・八十種好を備えた釈迦の身体

(B) 仏・菩薩が衆生を救うために、この世に現した方便応化身。

(1) 仏・菩薩が生きた身として現れた姿。

(2) 仏・菩薩が人間に化身した姿。

(3) 聖人や高僧を仏・菩薩に見立て、人間として生まれた姿。

(4) 靈験あらたかな仏像を(1)に見立てていう<sup>(4)</sup>。

(A) は仏典に根拠を持つもので、後に(B)が派生する。中世に於いては(B) — (3)・(4)の意もあるが、渡の云う「生身」は(B) — (1)もしくは(2)の意である。中世地蔵説話では、

「地蔵が亀となつて現れる話が一例ある『雑談集』第九卷第九話・狩野探幽縮図本『地蔵縁起』古典文庫一三九頁は類話）もの、主に「生きた人間」の姿となつて現れる。

では、近世ではどうかと云えば、中世同様、この世に生身で現れる話が多く存在する。『三因縁地蔵菩薩靈驗記』（一六八四年刊行）第九卷第十二話は、主人公が生身の地蔵に会うために、下野国岩船山に赴き、「伊賀房」という僧に会う話である。「伊賀」という名前は地蔵の種子「冠」（イ）「侍」（本来は冠だが慣習で「カ」に由来し<sup>5)</sup>、生身の地蔵が名乗る名前である<sup>6)</sup>。

年来地蔵ヲ信ジ奉ルコト、他ナシ。アマリノコトニ、「画像・木仏ハ人間ノ所為ナレバ、同クハ生身ノ御兒ヲ拝奉ン」ト思立テ、……其夜人來リテ柴ノ扉ヲ叩ガ、「地蔵房ヤ御座」トアレバ、「伊賀房是ニアリ」ト云ヘバ、……來ル人ゴトニ、「地蔵房」ト呼ヌレバ、アヤシキ事ニ思フ所ニ……（三弥井書店版下巻一一六〜一一八頁）

『地蔵菩薩利生記』（一六八八年刊行、以下、『利生記』と略）第五卷第一話は、信心深い僧が、老僧と化した地蔵に会つた話である。

髭髪には霜雪をける老翁の……杖にすがり。眉かすみて。

齒もなき口に咲をなし……夙夜かたり玉ひければ。聖もこれはただ人にあらず。菩薩の応跡の御言かと信じ奉て……（私架蔵本二丁表〜六丁裏）

『地蔵菩薩利益集』（一六九一年刊行、以下、『利益集』と略）第二卷第十話は、戦の最中に、泉州岸和田天性寺の地蔵像が大法師となつて現れ、敵を退散させる話である。

敵みかたがひに骨をくだくところに何ともなく大の法師一人。忽然とあらわれいづ。鐵棒をもつてさんざんにたたかへり……軍卒とともにいそぎかの地蔵堂にまうでて。尊容を拝し見玉ふに。こはいかに多の矢を射たてられさせ玉ふのみならず。鉄砲のあと又かずもなし。（私架蔵本二三丁表〜二四丁裏）

当該の合戦は本文中では、天正年中（一五七三〜九二）のこととされる<sup>7)</sup>。

『延命地蔵菩薩経直談鈔』（一六九七年刊行、以下、『直談鈔』と略）第七卷第四話は、地蔵が干した麦を取り込んでくれた話である。

俄二大雨降ケレバ堂主晒物ヲ案シ走り還テ見ルニ晒麥悉ク

堂内エ入レテアリ・・・寺ニ還リ地藏尊ヲ拜スルニ地藏ノ御足ニ土悉クツキテ・・・堂主紛レナク此麥ヲ地藏ノ入レ玉フコトヲ知り(勲誠社版五〇八頁)

生身の地藏が活動する姿は目撃されてはいないが、生身の地藏の仕業と解釈する。当該の地藏像は、この後、京都・大雲院の塔頭、養寿院に祀られることとなる。

『直談鈔』第八卷第十話は、辻の地藏像が三十才の法師となつて現れ、火を消してくれる話である。

三浦氏宅ニテ焼来ルトキ何方トモナク齡三十八カリナル法師一人来テ亭主ニ告ケルハ我ハ家ニテ働ク・・・各々一向水ヲ運ベシト云シヨリ・・・其ノ夢ニ畫ノ法師枕本ニ来リ。我ハ辻堂ノ地藏ナリ・・・(前同五八三頁・句点を補つた)

当該の地藏像はこの後、江戸増上寺塔頭、花岳院に祀られることとなる。

『地藏菩薩応驗新記』(一七〇四年刊行、以下『応驗新記』と略)上本第八話は、二つの話から成るが、うち一話は、道で乱暴者に絡まれている主人公を摂州大坂専修院の地藏像が二人の沙門となって助けてくれる話である。

半途にして俗男四五輩前後を困て戲謔醜態殆ど躪乱るに至る。時に沙門二人突然と現来て俗輩を叱す・・・二沙門婢女を先導して専修院に至、倏忽として隱没す。豈は大士の分身化現するに非ざることを得んや。(国書刊行会版二九頁)

『応驗新記』上末第十三話は、①勢州朝田寺の地藏像が八尺計りの大法師となり、寺再建を助ける話と、②出火の際、老法師となつて火を消してくれる話から成る。

虹梁甚だ大にして容易上架し難しとて、・・・八尺計の大法師一人、大梁を擎持て、さしもの高所へかると打架しければ、・・・「さては疑なく薩埵の神力を出して人工の爲に援助を垂させ給ふ。誠に希有の利益なり」とぞ感嘆しける。・・・其火薄暮に至て焼被しを、一老僧出来て消し給ひしに、寺僧臭煙の蓬尼に驚騒て駈集ければ、老僧忽焉として見え給さりきとなん。彼老僧も豈異人ならんや。菩薩の化現なること疑所なかりきと、人みな敬信すと伝侍る。(前同四四頁)

『本朝諸仏畫応記』(一七一八年刊行)中巻第二話は、計五つの話から成るが、そのうち一つは、地藏が小僧と化して現れ、谷

に落ちた弥兵衛に水を飲ませ、命が助かる話である。

## 二 生身の変質

御坂峠にのぼり、……谷そここころび落ちたり。……かたはらに小僧ありて、水をはこび弥兵衛が口にそそぎ看病す。……生気つきてかたりしは、「常に念じ奉る地藏来り給ひ、水をあたえ給ふと思ひしより人ごちつきし」とかたれり。(国書刊行会版二七頁)

『諸仏感応見好書』(一七二六年刊行)「地藏利益」には、地藏像転倒の際、黒衣<sup>(8)</sup>の僧(「地藏」が怪力で元に戻すのを手伝った話を載せる。

石地藏大風に転倒す。……前を通るに人有て呼ぶ。これを見れば異僧なり。「汝先に起んと思ふ。我合力せん」。……手を添れば、即ち起く。忽ち所在を失す。……黒衣の僧は、決して地藏なるべし。(原漢文・国書刊行会版八二頁)

なお、舞台は薩州長嶺村(現・鹿児島県大島郡喜界町長嶺)である。

以上見てきた通り、中世同様、近世でも地藏はこの世に生身で登場し、直接的に救済してくれるのである。

### (一) 主に小僧の姿から時に大法師・老僧の姿へ

しかしながら、中世と全く同一という訳ではなく、幾つか相違点も見られる。一つは、中世説話に於いて、地藏は主に「小僧」の姿で現れた<sup>(9)</sup>に対し、近世に於いては、小僧の姿で現われることもあるが、老僧もしくは大法師の姿で現れることも多くなる<sup>(10)</sup>。この変化の理由は一次文献からは不明である。例えば、職能と必ずしも関連している訳ではない。先に引用した「応驗新記」上末第十三話には、出火の際、地藏が老僧として現れ、火を消す話を含んでいた。話の筋からいって、老僧である必然性はない。

もともと地藏が小僧の姿で現れることは、経典・儀軌に根拠がある訳ではない。『地藏十輪經』には、「或いは聲聞の身と作り、……或いは童男と作り」(原漢文・大正藏第十三卷七二五頁下段)とあるので、小僧の姿となっても良い訳だが、この箇所のは最後は「かくの如く無量無数なる異類の身と作りて、諸の有情の爲に、應の如く説法し」(前同七二六頁)であり、特に小僧の姿を取る論拠とはならない。和歌森太郎は地藏が小僧の姿を取ることを「日本的」とした<sup>(11)</sup>が、中国宋代の説話集『地藏菩薩応驗記』全三二話のうち、三話に見られる<sup>(12)</sup>。この数字は無視して良いものではない。中国の地藏信仰の一要素が『今昔物語集』に取り入れられ、中世、さらに近世にまで継承されたと見なすべきである。

う。但し、その後、小僧の姿を取る地蔵が受容されていったのは、和歌森の指摘の通り、日本のシャーマニズムとの関連が想定される<sup>(13)</sup>。

先に「中世説話に於いて」と述べたのは、絵画ではそうではないからである。根津本『地蔵縁起』（室町時代成立）では等身大の姿で現れている。詞書を引用すると以下のようにある。

地蔵房みねにのほりて、我身をいたたきよりわけて、左右におしのけて、衣をぬくやうにしければ、等身の地蔵菩薩の、目も心もおよはぬにておはしましけり。（古典文庫『地蔵靈驗記絵詞集』一〇四頁）

興味を持たれた方は、ぜひ『新修日本絵巻物全集29』カラー図版七頁をご覧ください。

また、地獄に現れる地蔵が人よりも大きく描かれているという地獄絵も幾つか見られる<sup>(14)</sup>。地獄絵に於ける、等身大より大きい地蔵という観念が絵解きによって普及し、結果、時に現世でも大法師として現れる地蔵という観念が生み出されたと考えられる。但し、先に引用した通り、大法師の姿を取る地蔵は、戦いの手助けや高所作業に従事しており、職能と連関していることもあるようだ、詳しい論考は別稿を期したい。

では、老僧の姿はどうだろうか？ 中世説話に於いて、地蔵が

老僧の姿で現れるのは、管見の及んだ範囲、以下の二例のみである<sup>(15)</sup>。

其夜寅時ハカリニ相国（註ニ平清盛）ノ夢ニ老僧<sup>(16)</sup>ノ金ノマ  
タブリチモテ相国ノ頸チヒシトツキツラヌキ貞守（註ニ地  
蔵信者）カ首切ラハ入道カ首チツメ殺スヘシト仰ラレケ  
バタスケ侍ベシト申テマタブリチノガレテ汗水ニナリ夢覚  
テ（無住『聖財集』一切経印房版一八〜一九頁）

この話では老僧が地蔵の化身であるという明言はない。しかしながら、地蔵信者を救うために、老僧となって、警告を与えたと解釈することは可能である。ではなぜ、この話では老僧なのだろうか？ 中世の地蔵説話では、地蔵が警告を与え、従わないと、命が無い、といった話は、管見の及び限り、当該話しか存在しない。とすると、通常ではない職能のため、あえて小僧ではなく、童子とある意味正反対的存在ながら、職能的には相通する存在であつた翁<sup>(17)</sup>が僧形となつて現れたのではなからうか<sup>(18)</sup>。

もう一例は『清水寺縁起絵巻』（一五〇二年頃成立）である。

（補―田村麻呂）戦場に臨出給へる時いつくともなく老比丘一人老翁一人忽尔にすすみ出たり兇貌端正豪傑なり皆恐怖の思ひをなし・・・僧は大将軍のさきにたちて凶徒の矢

の雨脚のこどくなるを法衣に防御し（『続日本絵巻物大系  
5』詞書一六九頁上段）

『清水寺縁起絵巻』の「源流」、『元亨釈書』第九卷第十六話に於いては、清水寺の地藏像は小僧の姿で現れている。

時に小比丘及び小男子ありて矢を捨てて將軍に与ふ。（国訳

一切経版一八二頁）

『清水寺縁起絵巻』は、応仁の乱で荒廃した同寺のテコ入れのために造られたものであった<sup>(19)</sup>。ゆえに、当時普及しつつあった、少年の姿を取る<sup>(20)</sup>勝軍地藏との差別化を計ったため、職能的に、童子と相通ずる翁<sup>(21)</sup>の僧形としたと考えられる。

では、近世では何故、時に老僧の姿を取ることが中世に比べて多くなったのだろうか？先に引用した『応驗新記』上卷第十三話は消火の話であり、老僧の姿を取る必然性はない。『三國因縁地藏菩薩靈驗記』第四卷第十三話は、計十三の話から成るが、そのうち、地藏が七十才の僧となって現れ、田の草を刈ってくれた話を含む。

正和五年ノ夏、左吉病ニ犯レテ、月ヲ超テ元氣ス。サルカラ、田苗ノ草生茂テ、当作ノ穀アルベキヤウモナキヲ見テ、

心中ニ思ク、「日比ハ所願速ニ成シテアリシニ、今度ノ加被緩シテ、田、カクノゴトシ。サレバ十輪經ノ經、延命・本願ノ金口ニ、山川草木ニ至マテ変ジ玉フトカヤ。此ノ如クナラバ、何ゾ恵モシ玉ハザル」ト怨ミ白シナガラ本堂ニ参リシニ、下向ノ路次ニ見レバ、一草モナシ。耕耘ノ人ニ問ニ、「最前、年七旬ニモ及ヒ玉フ僧ノ、其ノ田ノ畦ヲ残ラズ一返通セ玉フヨリ外ナシ」トゾ云ケル。左吉不思議ヲナシ、「全ク地藏ノ御方便ナラン」ト、本堂ニ皈リテ礼拝シテ四方ヲ見ルニ、泥土ノ足跡、厨子ノ内マデアリキ。（前同上卷二二二頁）

これも職能から見て、老僧である必然性はない。また、『三國因縁地藏菩薩靈驗記』第五卷第十三話は、老僧と化して現れた地藏が、写経の助力をしてくれた話である（前同上卷二七八〜二八二頁）。これも老僧である必然性はない。

今一度確認しておけば、古代・中世に於いて、地藏が小僧の姿を取ることは經典・儀軌に根拠はなく、言い換えれば慣習的型に過ぎなかった。そのため、中世になると型が崩れ初め、時に老僧の姿を取ることもあり、さらに近世になると、大法師や老僧の姿も多く見られるようになった。但し、小僧の姿を取ることが一掃された訳ではなかった。もともとの經典（『地藏十輪經』）に於いて、地藏は教化のために何の姿も取るので、この変化はある意味

当然と云える。例は少ないが、近世地蔵説話では、四十代の僧『三國因縁地藏菩薩靈驗記』第八卷第八話・前同下卷四七頁）、老婆（『三國因縁地藏菩薩靈驗記』第八卷第五話・前同下卷三六〜三七頁）、比丘尼（『直談鈔』第九卷第三二話・前同六五二頁）などの姿を取ることがある。

老僧の姿を取ることが職能と無関係かどうかは、先に提示した大法師の問題と合わせて別稿を期したい。

## (二) 地蔵による間接的救済

中世と近世との、もう一つの相違は、中世に於いては生身の地蔵が直接的に救済したのに対し、近世では、地蔵が薬を与えて、その結果、病が治るといった、言わば、間接的救済の話も散見することである<sup>(2)</sup>。中世の事例を挙げれば、七卷本『宝物集』（一一九八年成立）・『大山寺縁起』（一二三一一〜九八年成立）では生身の地蔵が田植を行い（新日本古典文学大系版一七九頁・続群書類従版二〇五頁）、『星光寺縁起』（一四八七年成立、古典文庫版一二五〜一二六頁）では屋根修理を行っている。こうした、直接的に救済してくれる生身の地蔵は、先の引用の通り近世説話でも見られるが、一方、生身の地蔵が御符や薬を授け、その結果、病が治るといった話も散見するようになる。

ヨハイ七十バカリノ老僧白色ノ袈裟ヲカケ錫杖ヲタツサ

へ・・・沙門心得タリトテ三衣袋ノ中ヨリ御符三粒取出シ  
此ノ御符ヲ一日ニ一粒ツツ吞セ玉へ。南無地藏菩薩ト十返  
唱へナバ早速ニ病難ヲ退治スベシ・・・此ノ地藏菩薩コソ  
老僧ト現ジテ御符ヲ與玉フコト疑ナシトテ・・・『直談鈔』  
第五卷第二十八話・前同四一八〜四二〇頁

以上の『直談鈔』では、薬の服用と「南無地藏菩薩」と唱えることとセットであったが、以下の『応驗新記』では、そうした記述が無い。

夢中に一僧現じ給ひ、「汝が病革なり。此薬を服せよ」と、  
手親丹薬を口に含しめて言く、「我は伏見寺の石地藏也。汝  
が為に急難を救ふ」と言ひ、覺れば、薬氣口に満ちて大に  
嘔吐し、洗滌がごとく還復して家に帰・・・（『応驗新記』  
下本第七話・前同七九頁）

途にて彼御僧言しは、「我は長門町の地藏也。汝嘗て地藏講  
会の日、堂中に入れて我を敬す。是故に今汝が難を救な  
り・・・此守符を護持せよ」とて、懐に入させ給ふと・・・  
『応驗新記』下本第十一話・前同八二頁

この延長線上に、印行を行い、御影を得れば、病が治るといっ



た話を集めた『一萬體印造地藏尊感応記』（二八二二年刊行）を位置づけることができる。その最初は、夢に地藏が現れることから始まる。以下、冒頭箇所をかいつまんで引用する。

夢に。尊き僧の黒き衣に香色の袈裟をかけて。枕上にたち告ていはく。我かたちを一吋三分に彫刻て。河水にうがふべしと。（私架藏本五丁表〜裏）

正徳五年乙未かの家につかふる女、折たる針を口にくはえ、あやまり吞て咽に立ぬけず。・・・諸葉御符、その功なく、西順（引用者註―人名）がいはく、爰に靈験あらたなる地藏尊の尊容あり頂戴すべしと、一枚を水にて吞しむ、しばらくして吐逆す。（前同七丁裏）

地藏尊を、一万体印行し奉ること。病人みづから印するをよしとす。されど大病にていかにも手つからなしたがたき時は、看病人或は信心の輩。病人にかはりて印行成就すべし（前同九丁表）

『一萬體印造地藏尊感応記』の各説話では、印行を行い、御影を手に入れば、それで充分であり、生身の地藏に会う必要もないのである。ゆえに、同書では、冒頭の夢に、僧の姿をした地藏が

登場するものの、これ以外に生身の地藏は登場しない。試みに一話のみ引用する。

○何某大熱病癒たりし事

同年（引用者註―明和七年）の秋。同所（引用者註―大坂天王寺町にあるもの大熱病にて十日余も絶食にて苦痛かきりなし。その近辺の医師さまさま工を尽せともそのしるしなかりけり。さらにその妻女ふと地藏尊のことを聞つたへて。やがて同処龍徳寺より板木をかりて印行せしに。病人自然と快復してものごとし。（前同二十丁表〜裏）

印行の利益に関しては、先行する、『三国因縁地藏菩薩靈験記』にも二話ある。第九卷第八話は、印行の功德により、疫病の難を逃れる話だが、主人公はその後、生身の地藏に会っている（前同下巻一〇二〜一〇四頁）。第十二卷第六話は、上辺だけの印行ではかえって、地獄に墮ちてしまうという話である（前同下巻二二五〜二六二頁）。

御影によって、病気が治る話は『利益集』第三卷第七話にもあるが、地藏像を祀る寺に詣った上で、地藏に帰依にした上のことである。

浄心寺にいたり。・・・本尊に願をかけて御影を頂戴し。・・・

(前同十四丁表)

もつとも、この話でも生身の地蔵は登場しない。

### (三) 地蔵像の神聖視／地蔵像による現罰

生身の変質と入れ替わるが如く、近世になると、地蔵像がより神聖視されるようになってくる。先ほど述べた、御影を得れば充分という觀念もその一例である。また、地蔵像を拜むことだけで病が治る話も散見するようになる。

地蔵尊だにいのり奉れば。かなはざる事はなきにこそ。ふかく決定信をおこせり。その身つねにふく病とかいふにわづらひありて。むねのつかへつよく。山坂などのぼるはいふにおよばず身をすこしあらくはたらく事さへいきどほしけりて難義しけるが。まづ此やまひをなほし。もちいんとて。やがてふしおがみたのみとてまつりけるにまことに根ふかき難治のやまひにてありけるにたちまち平愈しけり。

『利益集』第四卷第七話・前同三〇丁裏く三二丁表)

本ヨリ宇賀辻ノ延命地蔵尊ヲ信ジケル・・・母ノ病ニ侍時ニモ偏ニ地蔵尊ニ祈リ・・・程ナク母ノ病平愈シケリ(『直談鈔』第二卷第十話・前同一五五く一五六頁)

中世であれば、生身の地蔵が現れ・・・というシーンが話のどこかにあるのが一般的だった訳だが、以上の話では生身の地蔵が登場することなく、問題が解決している。

さらに地蔵像を粗末にする、もしくは破壊すると、現世で病気にかかり、時に亡くなってしまおうといった罰を受けるという説話が多数見られるようになる。まず、『三国因縁地蔵菩薩靈驗記』の第七卷第五話が挙げられる。

地獄沢ト云フ小河ノ辺ニゾムトテ、渡シ事ヲ憂テ、高キ卒塔婆ノアリケルヲ、若者ドモニ、三人走リカカリテ押し倒シガ、若党ノ中ニ見付奉、**「アナ浅間敷、地蔵ノ御座アリシヲシラズシテ、踏ケルコトヨ」**ト云ヘバ、主人ガ聞テ、**「何条地蔵ト云ハ」**ト呵シケルホドニ、或ハ笑ヒ或ハアナドリ、同音ニ**「地蔵地蔵」**ト幾度モ嘲リス・・・其ノ後主人大病ヲウケテ、終ニ生涯ヲ果シヌ。郎等ニ為家ト申スモノモ、同ク卒病ニテ失似ケリ。(前同上卷四〇五く四〇六頁)

当該話は、死後、地蔵によつて蘇生する話である。その際、地蔵により仏道に入ること勧められる。

御値ハ彼ノ俗ニ向テ曰、「我ハ是汝橋ニ渡セシ地藏也。娑婆ニテ菩提心ヲ発シ、一心称名ノカヲ以テ、成仏ノ直道ニ入ベシ」ト。(前同四〇八〜四〇九頁)

地藏が仏道帰依を勧めめる点は、中世に良く見られた蘇生譚と類似している。時代が下ると、亡くなった後、地藏が救済してくれる、といった事が一切記されていないようになる。

もとより不信にして愚なるものどもなれば。なんの思慮もなく。かの尊像の結跏趺坐し玉へる。下の方を六七寸曳切奉りて。堂内に入まいらせぬ。かかる不道の罪業をなしけるゆへにや。この大工程なく煩付て。腰のあたり。みな腐て。死しけり。『利生記』第五卷第五話・前同二二丁表)

南都のあたりに。町中路辺に。石佛おほくまませり。中にも大かたは地藏ぼさつの形像なり。これは本むかし。松永弾正二上が嶽に城をかまへける時。石佛をあつめて石垣としたるが。：後に松永弾正この石佛の上にて切腹し。むなしくなる事自業のなすところといひながら。ひとつは三寶をうやまはず。かかる僻事せしによりて。現罰をかうふりしなり。『利益集』第二卷第八話・前同十八丁裏〜二十丁表)

大和国大福村の並。横内といふ里の端なる四辻に。石地藏ましまけり。貞享三年の秋のころ。かのちかきあたりの武士の下人。もとよりものの分をもしらぬ血氣放逸ものなりければ。手ずさみとして。鉄砲をもつてこの石地藏を打たりしかば。あたりぬとおぼして手ごたへしけるが。即時に自迷悶して。やがて絶入しける。『利益集』第二卷第十二話・前同二八丁表裏)

『利生記』・『利益集』では、罰を与える主体が地藏かどうか、明言はされていない。『礦石集』・『直談鈔』では、地藏による罰とすることが明言される話も多数出てくる。以下の引用の傍線部は、引用者による。

大坂玉造。越中町。或人の浦に。古き石地藏あり。：：近比其近處の女人。内裙を洗濯で覚えず。彼の石地藏の上に掛て晒けり。其夜より彼女狂して口ばしり。：：隣家の人々。こはいかにと騒きて。正しく地藏尊の罰ならんとて。其女の母に教へて。浄水を以て洗ひ奉り香花を供養して。懺悔せしかば。狂人も痊りけり。『礦石集』第二七話・法藏館版五二頁)

大坂伏見鍛冶町に石地藏あり。・・・又或人飛礫を此尊に中ければ。彼尊に石の中りたる所に。我が身にも瘡生して。久しく患みけり。越中町（引用者註―前話の地藏尊の所在）。伏見鍛冶町。兩処の地藏は。罰の事のみ聞て。其余の利生を聞ずといへども。是を以て推すに。香花を供養し。宝号を唱え。信仰帰依しなば。定めて掲焉の利益あらん。（『礦石集』第二八話・前同五三頁）

京三條室町東へ入ル町伏見屋何某ノ裏ニ傳教大師ノ御作ノ地藏菩薩アリ。天和年中ノ此口其ノ近所ノ女人内裙ヲ洗テ覺エズ彼ノ石地藏ノ前ニ掛テ晒シケリ。其ノ夜ヨリ彼女狂シテロハシリ亦裸ニテ走り回り・・・正ク地藏尊ノ罰ナラントテ『直談鈔』第三卷第四九話・前同二八三頁・句点を補った）

元禄二年秋ノ比京四條御旅ノ前松屋平八ト云フ者ノ洛外ニ往クニ三條大橋ノ本ニ石地藏アリ。彼ノ菩薩ノ側ニ溺セシカバ謬ツテ尊像ニ进リカカリケリ。即時ニ彼ガ肌葩大二腫テ痛ケリ。是モ地藏尊ノ罰ナリトテ清浄ニ洗ヒ香華ヲ供養シテ懺悔セシカバ身分ノ腫モ痊レリ（『直談鈔』第三卷第五十話・前同二八三〜二八四頁・句点を補った）

中世に於いては、地藏像を破壊することで地藏による現罰を受ける話は、かの有名な桂川地藏事件のみである。

彼石地藏ヲ切突ケルホトニ。忽腰居テ物狂ニ成ケリ。近邊物共集テ見之。地藏之御罰新ナル事ヲ貴ミケリ。（『看聞日記』応永三年七月十六日条・続群書類従版三〇頁）

地藏像の現罰は、人為的なねつ造であったことをまず確認する。問題は、地藏の罰を言い立てた近隣の人々が「さくら」であった可能性であるが、これは判別不能である。無論、引用箇所を含めて、人為的靈験を人々が信じたことも事実ではある。

『三国因縁地藏菩薩靈驗記』では、罰を与える主体は地藏ではなく、神である<sup>(23)</sup>。

其ノ夜夢ニ、僧一人来リ玉イテ翁ニ向テ言ク、「・・・彼ノ朝臣シキリニ不信ノ咎重クシテ、濟度スルニアタハズ。故ニ、天怒ヲ為テ、雨ヲ下降ス。竜神罰ヲアタヘテ、浪ヲ起ス。・・・」（第八卷第十一話・前同下卷六四頁）

天神モ此ノ人ヲ惡ミ玉イ、地神モイマシメ玉フ。我（引用者註―地藏）ガ平等ノ心ヲ以テ助ケントスレドモ、賞罰善神等ハ大ニ怒ヲ成、イヨイヨコレヲ戒、或トキハ罰神ト現

ジ、悪風・猛火トナリテ、中天ヲアタヘテコロフ罰ス。…  
(第十二卷第二話・前同下卷三三六頁)

先に引用した第七卷第五話も、地蔵が刻まれている卒塔婆を橋にしたため、病死し、地獄に落ちそうになった話ではあったが、地蔵による罰という明確な記述はなかった。

「仏罰」という観念が一般的になるのは近世であり<sup>(24)</sup>、例えば中世の起請文では「神罰冥罰」が一般的であった<sup>(25)</sup>。「冥罰」を『日葡辞書』で引くと、「天による秘密裏の処罰」(邦訳版四〇八頁)とある。以上の事柄を考えると、『三国因縁地蔵菩薩靈驗記』で、罰を与えるのが神であることは、中世からの継承と云える。

近世でもっとも早く発刊され、中世地蔵説話の集大成を旨指した<sup>(26)</sup>、『三国因縁地蔵菩薩靈驗記』の段階では「地蔵による罰」という観念は一般的ではなかったと考えられる。先に引用した通り、若干刊行年代が下る『利生記』・『利益集』でも、地蔵像を破壊すると、罰を受ける話が散見しているが、地蔵による罰とは明言されてはいない。一六九二年刊行『礦石集』以降、地蔵による罰が明確に述べられている話が散見するようになるのである。

また、時代が下ると、地蔵像が生身に変化して悪さをする話も登場する。

武州野島の浄瑠寺の本尊は、靈驗多し。…男と変じて在

家に下り、女の寝所に入り、夫婦と成しと曰ひ、…僧、女の手を取り狂言を吐く。和尚直に至り玉ば、此僧地蔵と成りて転倒す。『諸仏感応見好書』前同七九頁)

地蔵像が生身となって悪さをする話として、これ以外に、地蔵像が子どもと化し、勘定をこまかす、豆腐地蔵伝説(東京都文京区喜蓮寺)が挙げられる。伝説では、享保年間(一七一六～三二六)のこととされる<sup>(27)</sup>。また、岩手県遠野には、石地蔵が夜這いをする話が伝わっている<sup>(28)</sup>。

#### まとめ

近世地蔵説話集を見ると、地蔵は中世同様、生身でこの世に現れることがあった。この点は、中世と変わりがない。しかしながら、地蔵から授かった薬を服用するだけで、病が治るといった、間接的救済譚も散見するようになり、生身の地蔵が必要なくなっていく傾向が認められる。これと平行して、地蔵像が神聖視されるようになり、地蔵像を破壊すると、現世で地蔵による罰を受ける話が登場した。さらに、地蔵像が生身となって悪さを行う話も生まれてきた。これらの点が地蔵説話の近世的特質と云えるのである。

使用テキスト（一般的な本に収められているものは字数の都合上、本文で言及するに留めた。）

『地蔵菩薩利生記』く享保十九年版、浅野弥平衛、全三冊・各冊の冒頭に蔵印あり、私架蔵本 \*渡浩一『地蔵菩薩利生記』について（『明治大学教養論集』第二四二号 一九九一年）に記す、貞享五年版とも、安永八年版とも刊行年代が異なる。西田耕三『近世の僧と文学』（ペリかん社 二〇一〇年）「古書目録には享保十九年刊の本書が掲載されることがあるが、未見」（二六頁）とあるものと同一のものと想定される。

『地蔵菩薩利益集』く永田調兵衛・平楽寺小兵衛・浅見吉兵衛、元禄四年版、私架蔵本 \*渡浩一『地蔵菩薩利益集』の世界（『仏教民俗研究』第六号 一九八九年）のいう、元禄四年版Aにあたる

『礪石集』く『説教学全書第四編 前編 譬諭因縁 通俗礪石集』発行年代不明、法蔵館、底本不明、私架蔵本

『延命地蔵菩薩経直談鈔』く渡浩一編同名本、一九八五年、勉誠社、刀根家蔵本の影印

『一萬體印造地蔵尊感応記』く文政九年版、皇都書林・錢屋利兵衛・澤田吉左衛門、私架蔵本 \*杉山友美「玉川大学図書館蔵『地蔵菩薩老万体印行縁起』」（『実践国文学』五二号 一九九七年）にいう、(a) がこれに当たる。

\*私架蔵本『地蔵菩薩利生記』・『地蔵菩薩利益集』は科研報告書として、翻刻を刊行予定である。

\*本稿は科学研究費補助金・基盤(C)「路傍の地蔵」の宗教史的考察の研究成果の一部である。また、口頭発表「地蔵説話の継承と変遷」（説話文学会平成25年度大会）及び「地蔵の化身」観の変遷（日本思想史学会平成25年度大会）を修正したものである。質疑応答の際に質問・コメントしてくださった方には感謝申し上げる。

## 註

- (1) 渡浩一「生身地蔵の出現」（小松和彦・他『絵画の発見』平凡社 一九八六年五月）
- (2) 渡浩一「中世地蔵説話概観」（『東洋大学大学院紀要』二〇号 一九八三年）
- (3) 渡浩一「お地蔵さんの世界」（慶友社 二〇一一年）三六〜三七頁
- (4) 稲垣泰一「説話文学における生身譚」（『説話文学研究』第四三号 二〇〇八年）
- (5) 実例としては、服部清道『板碑概説』（角川書店 一九七二年）三六一頁参照
- (6) 渡浩一他編『一四巻本 三因縁地蔵菩薩靈驗記（下）』（三弥

- 井書店 二〇〇三年) 当該話の註釈による (渡筆・一一八頁)。
- (7) 岸和田市立郷土博物館『戦乱の中の岸和田城』(同 二〇〇四年) は、一五八四年の岸和田合戦のこととする(三七頁)。
- (8) 「黒衣」は通世僧の袈裟である。松尾剛次『鎌倉新仏教』(講談社 一九九五年) 五三頁。近世地蔵説話では、黒衣を着て現れる事が多いが、『宇治拾遺物語』第三卷第十三話では、白き衣を着て冥土に現れている(日本古典文学全集一五一頁)。
- (9) 小倉泰「お地蔵さんと子ども」『比較文学研究』第四八号 一九八五年)・岩崎雅彦「地蔵菩薩と子ども」『日本文学』二〇〇二年七月号)
- (10) 近世の方が中世より圧倒的に地蔵説話の数が多。その点を考慮すると、割合的には「多くなつた」とは言い難い。但し、そもそも中世地蔵説話の数は少なく、統計的分析は不可能である。
- (11) 和歌森太郎「地蔵信仰について」(櫻井徳太郎編『地蔵信仰』雄山閣 一九八三年) \*初出は一九五七年
- (12) 清水邦彦「地蔵が子どもの姿を取ることについて」『北陸宗教文化』第十七号 二〇〇五年)
- (13) 大島建彦「地蔵の説話と民俗」『道祖神と地蔵』(三弥井書店 一九九二年)
- (14) 奈良金剛寺蔵『矢田地蔵縁起』(十三世紀成立、奈良国立博物館『みほとけのかたち』一一二頁)・出光美術館蔵『六道絵』(十六世紀成立、富山県「立山博物館」編『地獄遊覧』四三頁)・矢田
- (15) 地蔵毎月日記絵(十六〜十七世紀成立、『新修日本絵巻全集29』及び種々の『熊野勸心十界曼荼羅』(現存本は全て十七世紀以降成立だが、もとは十六世紀成立)。「熊野勸心十界曼荼羅」に關しては、小栗栖健治『熊野観心十界曼荼羅』(岩田書院 二〇〇一年) 参照。
- (16) これ以外に『知足院縁起』では、地蔵像に關し、「老翁」が夢告を行つている(平岡定海『東大寺宗性上人之研究並史料』(中)『日本学術振興会 一九六〇年 三八二〜三八三頁])。この「老翁」が地蔵の化身である可能性はある。
- (17) 『三因因縁地蔵菩薩靈驗記』に再録される際は「僧」とのみである(第八卷第七話・前同下卷四三頁)。
- (18) 黒田日出男「童」と「翁」『境界の中世 象徴の中世』(東大出版会 一九八六年)
- (19) 禅竹「明宿集」では、翁面はつねに鬼面と一体のものとして伝承されてきたとされる。(日本思想大系『世阿弥』四〇七頁・山折哲雄「翁と童子」『神から翁へ』青土社 一九八九年の指摘による)とすれば、ここで、老僧(≡僧形の翁)が警告を与えるのも、鬼のイメージが反映されている可能性がある。
- (20) 清水寺編纂史委員会『清水寺史 第一卷』(清水寺 一九九五年) 三〇八頁・高岸輝「流浪の将軍と伝説の将軍」『室町絵巻の魅力』(吉川弘文館 二〇〇八年)
- (20) 現存する騎馬形勝軍地蔵像は江戸時代のものが多いが、一五〇〇

年代に遡れる、騎馬形勝軍地蔵像としては、長谷川等伯画「愛宕権現図（石川県七尾美術館蔵）」が挙げられる。本図の武人（勝軍地蔵であり、愛宕権現でもある）は、十代に見える。

註18に同じ。

(22) (21) 引用以外に、異僧（日光山の地蔵）のアドバイスによって、娘が更正する話（『諸仏感応見好書』前同七八頁）も、間接的救済譚と云えよう。

(23) 久野俊彦筆・当該話解説による。渡浩一他編『一四卷本地蔵菩薩靈驗記（下）』（前掲）六五頁・この場合、竜神や罰神は地蔵の化身であるかもしれないが、化身とは明言されていない。なお、第十卷第五話（前同下巻一四六〜一四七頁）は、悪業をなした人が罰を受ける地蔵説話を含むが、「ヲノツカラ罰ヲカフブルナラヒナリ」とある。

(24) 石田瑞麿『例文仏教語大辞典』（仏罰）の項による。但し、中世でも「仏罰」という言葉が無かった訳ではない。『例文仏教語大辞典』（仏罰）は、「仏・菩薩が悪業の人に下す罰」としている。中世の「仏罰」という言葉が如何なる文脈で使われていたか、といった詳しい分析は今後の課題としたい。

(25) 佐藤弘夫『アマテラスの変貌』（前掲）四三〜四六頁・ただし、「神罰仏罰」という表現が皆無であったかという点、そうではないので、註24と合わせて、詳しい分析は今後の課題としたい。

(26) 渡浩一「十四卷本『三因縁地蔵菩薩靈驗記』とその周辺」（『東

洋大学大学院紀要』第二号 一九八五年）

(27) 柳田国男「地蔵殿の苗字」（『定本柳田国男集 第27卷』筑摩書房 一九七〇年）\*初出は一九一三年

(28) 佐々木喜善「地蔵雑話」（『農民俚譚』初出一九三四年↓小川直之編『日本民俗選集 第12卷』前掲）

（しみず・くにひこ 金沢大学国際学類准教授）